

【多摩丘陵・私の出会った生き物たち22】

< 冬の林で >

桑原紀子

真冬のような寒さが続く12月の昼下がり、散歩に出かけました。空は青く日差しは暖かで、冬でも、外はやはりいい気持ちです。

近くの調整池に寄ってみると、冬鳥のカモたちの顔ぶれが増えていました。カワセミもつがいで、水面にダイビングして餌を取ったり、ピュッと糞を飛ばしたりしています。調整池の周遊道路はカワセミの白い糞の跡が無数に残っていて、こんなに糞をするなんて、さぞかし沢山の小魚を食べているのだな、と思いました。

池を後にして尾根に上がり、西緑地に回ってみました。

冬の林はしんとして、生き物の気配はありません。少し前まで姿を見せていた越冬蝶や、越冬するツチナゴもすっかり眠りについたのか、草むらも静かです。

コナラやクリの若い林に入ると、一本の幹に黒い塊が広がっているのを見つけました。クリノオオアブラムシの集団産卵です。アブラムシのなかでは最大で、4ミリくらいの黒い洋梨のような形です。毎年今頃になると、雌たちは幹の下方に集まって押し合いへし合いしながら、沢山の卵を産み付け、卵はそのまま越冬します。ピカピカ光る茶褐色の楕円形の卵は幹にぎっしり産み付けられ、雌たちはそれを守るように覆いかぶさっています。

探すと、あちこちのクリやコナラの幹の片面に黒い塊が見つかりました。

一匹で生み始めているのもいます。集合フェロモンでどんどん集まってくるのでしょうか。

卵を産みつける幹の場所は殆どが地面から50センチまでですが、方角はバラバラです。

こんなにクリノオオアブラムシがいたなんて、葉の茂っている時は気がつきませんでした。

これは冬の風物詩だなど、彼らのことを調べてみたら、なかなか大変な生き方をしているのです。

驚いたのは、12月には越冬のための卵を産むのですが、この卵が来年春に孵化して成虫になると、今度は胎生で子どもを生むのです。そしてその子どもも又子どもを生み、卵を産

むのは冬期だけです。

寄生蜂などの天敵も多く、早春に最初に飛び始める小さな可愛いヒラタアブは、クリノオオアブラムシの幼虫を餌にします。3月になると、幹の卵のそばにアブの白い卵が産みつけられているとのこと。

今年の3月、ここでヒラタアブに出会いました。でもクリノオオアブラムシには気がつきませんでした。発生の多い年と少ない年があるのかもしれませんが、そうすると来春はヒラタアブも増えるのでしょうか。

この小さな林で繰り広げられる生命のドラマを、来年も継続して見ようと楽しみになりました。

